



〈一冊の本〉

『暴走老人!』

(藤原智美【著】)

文芸春秋 2007年8月)



私が情報を大学にて学び始めたころ、情報と社会の間にあるのは、「化」であった。いわゆる、情報に金銭的価値が見いだせる「情報化社会」である。そして、当時のノートには、自分だけが分かる文字にて、情報化社会の定義を次のように記している。

「産業社会が十分に成熟し、基幹産業の徹底した展開がみられ、製造業の寡占化が進んで少数の企業で消費財の提供をまかない得る段階において、情報とサービスそのものに価格が生じる機能を先鋭化させた社会」

人間が情報を操り、情報の恩恵を受けながら、便利で明るい未来になる、はずだった。

しかし、現在、情報と社会の間にあるのは、「過剰」という語ではないか。情報過剰社会では、人間は情報（厳密には、情報を流通させる仕組み）に操られてしまっているのかもしれない。その一つの現れに…人が「待たない」「待てない」、暴走するということであろう。ただ、首をかしげたくなるようなニュースは、どちらかという若者よりも高齢者の印象が強い。

筆者は、「分別があってしかるべきとされる老人が、ときに不可解な行動で周囲と摩擦を起こす。あるいは暴力的な行動に走る。」(p.14) とされる新老人の現実を「時間」、「空間」、「感情」を切り口につぶさにみていくことで、情報過剰社会に対応できない高齢者の生きづらさを浮き彫りにしている。

「待たされる」ストレスから解放されない事態、孤独な郊外化、システム化によって強制される透明なルール、感情と身体を切り離れた労働者が慇懃無礼なまでに丁寧に対応するサービス場面。これらの事象に身体や判断能力が対応できずに暴走せざるを得なかった老人たちのエピソードに触れるたび、私自身も日々（というよりも、秒々？）変化する社会に対応できない気詰まりを感じていただけに、納得いくものであった。老人と言わずとも、情報過多社会になじめない人間はいつ「暴走する人々」になってもおかしくないのである。

「情報社会に対応するためには、情報を見つけ・まとめ・発信する情報リテラシーを身につけるべし」と市井では騒ぐ。しかし、民主主義という社会の構成員が自らの頭で判断し行動することが求められながら、情報を等しく入手するインフラが保障されていない日本では、未だ以て「自己責任」という言葉が跋扈する。こんな社会に老人はおろか、若者までも生きることへの希望が持てようか。

最後に。この本のテーマは老人批判ではない。書名だけで内容を暴走気味に推測することなく、私たちは1冊の本とじっくり付き合うことも時には大切だろう。

(本研究所研究員 山田美幸
図書館情報論)